# 高瀬淳一著『サミットがわかれば世界が読める』

名古屋外国語大学出版会、二〇一五年

平山 陽洋

本書は、昨年二〇一五年に発足した名古屋外国語大学出版会の記念すべき最初の刊行物であり、出版会の理念にかなった素晴らしい内容の書籍である。出版会の運営に微力ながら携わる評者は、出版会の理念のひとつとして、社会が軋みをあげつつ変容するいまの時代を生きる多くの人びと、わけても大学生に、生きることの意味を見つめなおしてもらうための材料として、アカデミズムの知をわかりやすい内容で届ける、という認識があると理解する。現代国際学部教授の高瀬淳一先生が執筆された本書は、本年中部地方で開催されるサミットについての基礎知識を丁寧に説明する内容であり、出版会の理念をまさに体現している。

本書はブックレットであり、だれにとっても手にとりやすい。そこでは、これまで高瀬先生が『政治家を疑え』（講談社、二〇〇九年）等の一般読者向けの多くの著作で開拓されてきた、語りかけるような平易な文体が採用されている。また、サミットを詳しく知らない人が抱きがちな誤解の数々が本文中に盛り込まれ、それらをひとつひとつ訂正していく叙述がなされている。読者は、そうした文体や叙述の工夫により、本書を読み進めるうちに、サミットの基礎知識をしっかりと身につけることができるだろう。

本書は四つの章から成っている。それぞれ、「サミット参加国」、「サミットの理論」、「サミットの仕組み」、「サミットの議題」という章題である。

第一章では、G7やG20、拡大会合といった諸会議の位置づけとそれぞれに参加する国・組織が説明される。加えて、歴史的変遷についても簡潔に叙述される。たとえば、一九七五年のサミット創設の背景として、石油危機という経済情勢があったこと、そして、崩壊するソ連の経済的支援と国際市場への統合という課題が九〇年代に生まれたこと、さらに、ソ連の後継であるロシアがサミットの正式メンバーとなりG8時代を迎えるが、二〇一四年のクリミア情勢の緊迫に伴いロシアの参加停止に至ったこと、等が指摘され、サミット史上の転換が理解される。

第二章では、まずマクロな視点から、国際秩序の維持と形成に果たしてきたサミットの役割が説明される。メンバーが複数であるとともにその数が限られたサミットは、そうしたメンバー構成により、覇権的な一国による秩序形成を避ける一方で、国連に見られるように多すぎる参加国の利害調整が困難に陥るのも避けるかたちで、国際秩序を築くのに貢献してきたとされる。あわせて、ミクロな視点から、サミットと各国内政が連動するメカニズムが論じられる。

第三章は、開催地の選定や開催日程、各国の事前意見調整の担い手について説明される。加えて、サミット開催にあわせて開かれる閣僚会合や専門家会議が紹介され、サミットの構成・あり方についての第一章の説明が補強される。

最後の第四章では、経済的な動機から出発したサミットが、その議題を経済から政治、そして社会問題へと拡大してく経緯が叙述される。そこでは、八〇年代にソ連の軍事展開が政治問題として扱われるようになったこと、そして、途上国の経済支援や国際機関の組織再編・経費削減が課題と認識された九〇年代を経て、現在は、犯罪や環境、衛生といった社会問題が議題となった、と論じられる。そして最後に、公式文書や公約順守にかんする説明をふまえ、サミットの役割を評価・査定する公的システムの現在が紹介される。

一貫してわかりやすく、要を得ていて素晴らしい。各種エピソードを配したコラムも味わい深い。ぜひ本書を手に、今年のサミットを迎えたい。